

昭和天皇とその時代

はじめに

昭和時代は裕仁皇太子の践祚が行われて天皇になった時から開始する¹。昭和天皇の在位期間(1926-1989)は、歴代天皇の中でも最も長く、激動の時代でもあった。近年日本では、迪宮の1901年4月29日の誕生から1989年1月7日の死去、その後1991年3月30日の昭和天皇武蔵野陵の陵籍登録までを年代順に記述した『昭和天皇実録』が宮内庁によって公開されている²。その公開直後から天皇とその時代に関する活発な論議が展開されてきた³。その論議や激動の時代の主要な問題などについては、本論文集に日本人の専門家が詳しく説明しながら分析されるので、私は「戦争と平和」の昭和時代における天皇の生涯と重要な出来事にだけ焦点を絞ってまとめた形で紹介したいと思う。

1 幼年時代

昭和天皇が生まれたのは明治時代(1868-1912)の後半であった。明治時代は、欧米列強の植民地化を免れるために西洋化と近代化、文明開化を推進した時代であり、日本にとって産業革命時代でもあった。欧米諸国の制度・文物の移入による諸改革が急速に行われた。また、封建制度にかわる中央集権体制が確立し、1889年に近代的な『大日本帝国憲法』が公布された。明治初期の「富国・強兵」というスローガンが1868年の倒幕と王政復古の時期から30年も経たないうちに実現された。1895年に清国と、1905年にロシア帝国との戦争で勝利を得た結果、日本はアジアの大国となった。

¹ この論文では、幾つかの歴史用語を除いて、天皇や皇室に関する敬語を使用しない。

² 宮内庁編『昭和天皇実録』12巻、東京書籍、2015-2017年。

³ 原武史『「昭和天皇実録」を読む』岩波書店、2015年。半藤一利他『「昭和天皇実録」の謎を解く』文藝春秋、2015年。茶谷誠一他『昭和天皇7つの決断の真相』歴史 REAL編『昭和天皇』(別冊『歴史 REAL』)洋泉社、2015年など。

昭和天皇は1901年4月29日、東京の青山御所（東宮御所）において嘉仁皇太子（1879-1926、1912年から大正天皇）と節子妃（1884-1951、旧撰家の九条道孝の4女、貞明皇后）の第一男子として誕生した⁴。出生7日目（5月5日）に明治天皇が初孫に諱を裕仁（ひろひと）と命名して幼年時代の称号として迪宮（みちのみや）を与えた。この誕生は両親と祖父母のみならず、皇室、日本国民にも大きな喜びをもたらした、特別な祝賀が執り行われた。20世紀初めは日本にとって希望の多い時期であった。

裕仁親王は、生後2か月の時に、御養育掛になった元薩摩藩士の川村純義海軍中將（1836-1904）の東京邸に預けられた。1904年11月に川村が死去した後、弟・淳宮（秩父宮雍仁親王、1902-1953）と共に沼津御用邸に移った。1906年5月から青山御所内に設けられた幼稚園に通い、1908年4月には学習院初等科に入学し、学習院院長・乃木希典陸軍大将（1849-1912）の教育を受けた。乃木は元長州藩士で、川村と同様に明治天皇の信任が厚かった。薩摩と長州両藩の志士が「倒幕・王政復古・明治維新」の過程で指導的な役割を果たした事実もその信任の理由であった。その志士は後に藩閥官僚政府の中心となった。乃木は日露戦争の英雄でもあり、明治天皇大葬が行われた日に自殺し、天皇に殉じた。彼の裕仁親王に与えた影響は特に強かった。親王は乃木に対し深い尊敬心を抱いていた。

1912年7月30日、祖父・明治天皇が崩御し、父・嘉仁皇太子が践祚して天皇となり、同時に裕仁親王は皇太子となった。正式な立太子礼は1916年11月3日に行われた。そして元号は明治から大正へ改元された⁵。

2 皇太子時代

大正時代（1912-1926）に、日本は大きく変わった。いわゆる大正デモクラシーである。中国とロシアでの革命や第一次世界大戦の影響も強く、その戦争のおかげで日本は世界の大国になりえたと言えるであろう。明治以来の藩閥支配体制が揺らいで、政党勢力が進出し、原敬（1856-1921）が日本初の「平民宰相」として日本初の本格的な政党内閣を組織した。労働組合などが結成され、労働争議が激化するなど、社会的な矛盾が深まっていった。その結果、普通選挙法が成立したが同時に治安維持法も制定された。大正期の知識人は、改造・革命・革新・維新の4つの政治運動をスローガンに掲げた。文化風俗面では、近代都市の発達や経済の拡大に伴い、都市文化、大衆文化が花開き、「大正モダン」と呼ばれる華やかな風潮を特徴とする。

⁴ 宮内庁編『昭和天皇実録』第一巻、2015年、1-10頁。文春新書編集部『昭和天皇の履歴書』文藝春秋、2008年、13-90頁。昭和天皇についての書物は多く、例えば、伊藤2011、原2008、文春新書編集部2008等がある。

⁵ 宮内庁編『昭和天皇実録』第一巻、2015年、588-599頁。

1912年9月に、裕仁皇太子は陸海軍少尉に任官し、近衛歩兵第1連隊附および第1艦隊附となった。将来大元帥になるためにその時から陸海軍の式典への出席や、軍事訓練見学などの軍務を始めた。1914年3月31日に学習院初等科を卒業し、翌4月から東宮御学問所に入る⁶。これは乃木大将の建言をもとに設置された皇太子のいわゆる帝王教育のための特別な学校であった。東郷平八郎元帥(1848-1934、海軍大将)が東宮御学問所の総裁となった。彼は、元薩摩藩士で、明治時代の日本海軍の指揮官として日清戦争・日露戦争の勝利に大きく貢献し、特に日露戦争においては、連合艦隊を率いて日本海海戦で当時世界屈指の戦力を誇ったロシア帝国バルチック艦隊を一方的に破ったことで世界の注目を集めた。乃木のアイデアに基づき東郷が皇太子の教育のため一流の学者を集めた⁷。国語・漢文・外国語・地理・歴史・数学・博物・倫理・武術(馬術、剣術、体操)などの科目が用意された。その他に、例えば、軍人による軍事学の講義も行われた。1914年に第一次世界大戦が起こると実際の対戦についての講演を聞いたりして、欧州の実情を学んだ。面白いのは、政治教育は行われなかったことである。

ところが、大正天皇は元来体が丈夫ではなく、1917年から健康状態がすぐれず公務を休むようになった。そのために裕仁皇太子は時々天皇の公務をこなすはじめた。例えば、大使・公使の信任状奉呈式に、あるいは陸軍大学校・海軍大学校の卒業式に出席したりした。1920年4月に大分県で開かれた陸軍特別大演習も代理で統監した。

そのような状況のなかで、前述の原首相は皇太子の政治教育が十分ではない、欧州外遊が必要だと進言した。皇太子は1921年2月28日、東宮御学問所を修了してから3月3日から9月3日まで軍艦「香取」でイギリスをはじめ、フランス・ベルギー・オランダ・イタリア・バチカンのヨーロッパ6か国を歴訪した⁸。日本の皇太子がヨーロッパを訪問したのは初めてのことであり、日本国内でも大きな話題となった。国民の中では皇太子の人气が高まり、裕仁自身は渡欧で自信がついた。

大正天皇の病状悪化の中で1921年11月25日、20歳で摂政に就任し、摂政宮と称した⁹。その後、1923年4月に台湾を、1925年8月に樺太を視察した。

1924年1月に皇族である久邇宮邦彦の第一王女・良子女王(香淳皇后)と結婚した¹⁰。1918年1月にすでに良子が皇太子妃に内定されたが、様々な理由で(宮中某重大事件＝久邇宮家に色盲遺伝があったことや、関東大震災など)結婚の儀が延期された。1925

⁶ 宮内庁編『昭和天皇実録』第二巻、2015年、35-41頁。文春新書編集部、前掲書、91-148頁。

⁷ 所功「二十余年の帝王教育」歴史REAL編『昭和天皇』(別冊『歴史 REAL』)洋泉社、2015年、86-93頁。

⁸ 宮内庁編『昭和天皇実録』第三巻、2015年、28-459頁。波多野勝『裕仁皇太子ヨーロッパ外遊記』草思社、1998年。

⁹ 宮内庁編『昭和天皇実録』第三巻、2015年、519-525頁。

¹⁰ 宮内庁編『昭和天皇実録』第四巻、2015年、16-21頁。

年から2男5女が誕生した。1933年に生まれた長男の継宮明仁親王が後1989年に天皇となる¹¹。

1926年12月25日大正天皇の崩御を受け、皇太子は踐祚して天皇になり、「昭和」という時代が始まった¹²。正式な即位の大礼は1928年11月10日、京都御所で行われた¹³。

3 天皇時代

昭和時代(1926-1989)は一般的に次の3つの時期に区分されている。

- 1926年から1945年までの民主主義・ナショナリズム・戦争の時代
- 1945年から1952年までの占領期
- 1952年から1989年までの平和・民主化・高度経済成長の時代である。

3.1 戦争の昭和時代

その時期、裕仁は明治憲法に基づいた「神聖天皇」であった。即位大礼の後、「戦争」の時代が始まった。昭和天皇は、祖父の明治天皇とその意向を受けた乃木大将から精神的影響を強く受けた。他方、父母であった大正天皇と貞明皇后やその信任の厚い御養育掛たちの西洋や世界への憧れや自由な人間観にも強い影響を受けた。裕仁の価値観をある程度完成させたのが、皇太子時代のヨーロッパ訪問であった。天皇になってからは昭和の激動の時代に突入した。民主化や近代化政策を推進していった日本は、経済危機に陥ったことから西洋との関係を断ち切り、やがて戦争を主導するようになった。天皇は軍部をどう抑制したらいいかに悩み、心ならずも日中戦争(1937-1945)からアジア・太平洋戦争(1941-1945)への道を裁可することとなった¹⁴。それまでの近代天皇の権力行使の慣習を破って、自分の意思を公然と示し、政府で正式に決まったことでも裁可しないという決断には踏み切れなかった。軍部大臣が辞任し内閣が倒れる。軍部が大臣を出さないことが確実なので、いつまでも内閣が成立しない。すぐに軍部がクーデターをおこさないにしても内閣不在による政治混乱は確実に起こる。結局、昭和天皇は軍部に屈服し、天皇の権威を落としてしまい、軍部の抑制はさらに困難になる。

¹¹ 『昭和天皇。その波瀾の一生』(別冊『歴史読本』5月号)1990年、34-35頁。

¹² 宮内庁編『昭和天皇実録』第四巻、2015年、598-604頁。

¹³ 宮内庁編『昭和天皇実録』第五巻、2016年、201-238頁。

¹⁴ 加藤陽子『昭和天皇と戦争の世紀』、『天皇の歴史』第8巻、講談社、2011年、195-352頁。

しかし、こうした状況にもかかわらず1928年以降、昭和天皇は数回積極的に決断した¹⁵。1928年に満州軍閥の総帥、張作霖が爆殺されたいわゆる満州某重大事件のとき暴走する関東軍が、満蒙権益を拡大するためにこの事件をおこした。責任者処分に関して、内閣総理大臣・田中義一(1864-1929)は責任者を厳正に処罰すると昭和天皇に約束したにもかかわらず、軍や閣内の反対もあって処罰しなかった。結局、天皇は田中内閣に総辞職させた。これが天皇の最初の決断であった。この事件で、天皇はその後の政治的関与について慎重になったといわれる。そして不景気などの理由で、軍人や右翼・国粹主義者が政治等に与える影響が強くなり、日本は戦争の道をたどり始めた。

1931年9月18日には関東軍の謀略により満州事変が勃発した。関東軍は満州鉄道沿線の首都と主要都市で軍事行動を起こして、戦時体制に入った。このことが1945年の敗戦までにいたる大戦争の第一歩となった。政府は戦争不拡大の方針を採ったが、関東軍はそれを無視する形で発展していった。日本は満洲建国に前後して、国際連盟から撤退した。このことにより日本は国際的に決定的に孤立の道を歩んでいくこととなる。

その後、青年将校を含む軍部急進派と右翼団体を中心に、明治維新の精神の復興、天皇親政を求める国家革新の昭和維新をスローガンとする右翼思想が唱えられ、その思想の影響で1932年から国内で連続テロ事件(血盟団事件、五・一五事件など)が発生した。特に有名なのは1936年の2・26事件であった¹⁶。この事件のときに、斎藤実内大臣、高橋蔵相らが射殺され、岡田啓介首相、鈴木貫太郎侍従長、牧野伸顕前内大臣が襲撃された。それが政党内閣に終焉をもたらした。その時昭和天皇は反乱将校たちに激怒し、徹底した武力鎮圧を命じた。

1937年には日中戦争が始まった。国防の観点から思想統制と国民生活向上を図って戦時体制への協力を国民に求め、戦争遂行のために国家総動員法が発令された。その後、1939年からアメリカやイギリスとの関係が悪化し、第2次世界大戦が勃発したが、日本は「欧州戦争に介入せず」と声明した。1940年、フランスがナチス・ドイツに降伏し、ドイツ・イタリアの勢力が拡大するに及んで日独伊三国同盟を締結した。また、ソ連との間に日ソ中立条約が締結されて、満州国・モンゴル人民共和国の尊重と相互不可侵が約束された。同時に日本の侵略を阻止するためにアメリカ、イギリス等は日本への貿易を制限し、1941年8月に米国は石油禁輸を決行した。島国の日本にとって経済封鎖は致命的であった。そこで陸海軍や政府は開戦論を強めていった。9月開戦を議する御前会議の席上、昭和天皇は戦争を避ける希望を表明したが、結局、12月1日に大本営政府連絡会議

¹⁵ 茶谷誠一他「昭和天皇7つの決断の真相」歴史 REAL編『昭和天皇』(別冊『歴史 REAL』)洋泉社、2015年、36-83頁。秦郁彦『昭和天皇五つの決断』武芸春秋、1994年。

¹⁶ Ewa Pałasz-Rutkowska, "General Masaki Jinzaburō and the Imperial Way Faction (Kōdōha) in the Japanese Army 1932-1935", part two, *Analecta Nipponica* No. 5/2015, pp. 139-164.

で対米国、英国、オランダとの開戦を決定した¹⁷。それは犠牲者・被害の多い、悲劇的な戦争に発展した。

1945年8月に広島・長崎に原子爆弾が投下され、ソ連の対日参戦があり、軍部の戦争継続意欲が著しく弱まったのを機に、ようやく昭和天皇は、14日の御前会議のとき、強い意思でポツダム宣言の無条件受諾の決断(聖断)を下し、戦争終結を命じた。同日には終戦詔書を自ら音読して録音し、8月15日正午に、ラジオ放送(玉音放送)を通して臣民に伝えた¹⁸。

3.2 占領の昭和時代

1945年から1952年まで日本は連合国軍の軍事占領下に置かれた。連合国軍最高司令官総司令部(GHQ/SCAP)の軍政は布かれず、アメリカによる直接的な統治があった沖縄・小笠原諸島諸島と、ソ連によって占領された歯舞群島・千島列島・樺太を除き日本国政府が行う間接統治が行われた。1945年9月27日、天皇とGHQ総司令官ダグラス・マッカーサー(1880-1964)の会見が行われた¹⁹。このとき、二人の有名な写真が撮影されただけでなく、マッカーサーの天皇に対する心情も大いに変わった²⁰。一つの理由は、天皇は敗戦に至った戦争の、いろいろな責任が追及されているが、責任はすべて私にあると言ったことだと言われている。しかし極東軍事裁判の被告リストのなかに天皇の名前はなかった。それはマッカーサーのおかげであり、国内の混乱を避けるためにこの決定を下し、天皇は退位すべきでないと言った²¹。

戦争責任問題は未だ解決されていないが、昭和天皇には法的な戦争責任はなかった。1947年まで有効であった『大日本帝国憲法』(第55条)に「国務大臣は天皇を輔弼し其の責に任ず。凡て法律勅令其の他国務に関する詔勅は国務大臣の副署を要す」²²と制定されたからであった。天皇が国務大臣の輔弼により、国務上の行為をなすけれども、国務大臣はそれに副署して責任を負う立場になり、何かの折には国務各大臣が責任を追及されたわけである。しかし天皇自身は、何とか戦争を止められなかったか、もしくは早く終結できなかったか、という戦争に対する道義的責任を崩御するまで自問し続けた。

¹⁷ 宮内庁編『昭和天皇実録』第八巻、2016年、558-580頁。

¹⁸ 宮内庁編『昭和天皇実録』第九巻、2016年、764-775頁。

¹⁹ 同上、829-837頁。

²⁰ 豊下櫛彦『昭和天皇・マッカーサー会見』岩波書店、2014年。

²¹ Katarzyna Starecka, „Geneza systemu cesarza-symbolu” [Genesis of the Symbol-Emperor System], in Urszula Mach-Bryson [&] Anna Zalewska (eds.), *Z chryzantemą w herbie* [With Chrysanthemum in Seal], Japonica, Warszawa 2014, pp.63-67.

²² 内閣官報局編『法令全書』第22巻1、原書房、1889年(再版1978年)、6頁。

1946年1月1日の「新年に際しての詔書」（いわゆる人間宣言）で、天皇の神格性などを否定し、新日本建設への希望を述べた。天皇と国民の絆は、信頼と敬愛によって結ばれるものであり、神話と伝説によって生じたものではないと述べた。天皇が「現御神」（アキツミカミ/アキツカミ）²³であるとか、日本国民がほかに優越した民族で、世界を支配すべき運命をもっているといったことは、架空の概念であるとした²⁴。この詔書の内容は、初めGHQが原案をつくり、それに天皇自身、天皇側近、日本政府などの意見を加えて日本語草案が作成された。

「人間天皇」となってすぐ、1946年2月から1954年8月にかけて昭和天皇は敗戦に打ちひしがれた国民を励ますために沖縄県を除く全国各地を巡幸した。総行程は31225キロ、165日間にのぼり、天皇は1141か所を視察した²⁵。特に大事だったのは、世界で唯一、原爆投下の被害を受けた広島と長崎であった。広島と長崎への巡幸は、それぞれ1947年の12月7日と1949年の5月27日に実現された。天皇は熾烈な地上戦により多大な被害を受けた沖縄を訪れたがっていたが、結局訪れなかった。一つの理由は、1946年にアメリカ軍政へ移管され、アメリカ領となったことだった。1972年の返還後も基地問題があった。もう一つは、膨大な死傷者を出した沖縄県民の感情を周囲が慮ったこともあった²⁶。

1946年に公布された『日本国憲法』²⁷は『大日本帝国憲法』の改正という形で成立したが、その成立過程にはGHQが深く関与した²⁸。その内容は、主権は国民に存するとして「国民主権」、「基本的人権尊重」と「平和主義」を三大原理とした。天皇は、日本国および日本国民統合の象徴とされ、天皇の国政への関与は禁じられた。

1952年4月28日に日本との平和条約（サンフランシスコ講和条約）が発効し、日本国の主権が回復された。

3.3 平和の昭和時代

民主化された日本は大きな発展を遂げ、1955-1964年にわたる高度経済成長の結果、世界第2位の経済大国となった。そのときに、「新三種の神器」と呼ばれた新製品の

²³ 現御神、現人神については、皇室事典編集委員会編『皇室辞典』角川学芸出版、2009年、428-430頁及び、Pałasz-Rutkowska、„Dwa ciała cesarza Meiji”, op. cit., pp. 166-169を参照

²⁴ 宮内庁編『昭和天皇実録』第十巻、2017年、2-4頁。村上重良編『皇室辞典』東京堂出版、1980年、280-281頁。

²⁵ 皇室事典編集委員会編『皇室辞典』角川学芸出版、2009年、215頁。

²⁶ 『実録昭和天皇』（別冊『宝島』2320）宝島社、2015年、58-63頁。前坂俊之「地方巡幸で現れた素顔」歴史 REAL編『昭和天皇』（別冊『歴史 REAL』）洋泉社、2015年、102-107頁。

²⁷ 本文：<http://law.e-gov.go.jp/htldata/S21/S21KE000.html> [2017年7月7日閲覧]、ポーランド語訳：Konstytucja Japonii [Constitution of Japan] (trans. Suzuki Teruji), <http://www.pl.emb-japan.go.jp/relations/konstytucja.htm> [2017年7月7日閲覧]。

²⁸ Katarzyna Starecka, op.cit., pp. 67-80.

家電があり、3C(カラーテレビ・クーラー・自動車)と呼ばれて憧れのヒット商品となった。この間、1959年4月10日に、明仁皇太子と日清製粉社長の娘、正田美智子との結婚の儀が行われた。皇室史上初めて民間出身の女性が皇太子妃になった。そのため「ミッチーブーム」という国民的熱狂が生まれて、民間から妃が選ばれたことで戦後民主主義にふさわしい皇室になったと美智子を歓迎した²⁹。

「昭和元祿」も流行語となり、映画・漫画・アニメなどの大衆文化が目覚ましい発展をとげた。そのうえ、名神高速道路(1963)、東海道新幹線と東京オリンピック(1964)、日本万国博覧会(1970)の成功によって 経済は最高潮を迎えたが、中東戦争がもたらしたオイルショックによって成長が止まった。そのころ、国防問題(日米安全条約と米軍基地)、政治問題(派閥対立)、エネルギー問題、社会問題(公害・福祉・交通戦争)、食料問題(若い人の農業離れ)、学生運動激化問題、などの様々な問題が頭をもたげた。外交上も困難は少なくなかったが、国際情勢が変動する70年代にいわゆる皇室外交が大きく期待された。戦後、天皇外遊の前例はなく、新しい法律が必要となった。日本国憲法の(第4条)規定で「国政に関する権能を有しない」天皇になったからであった。

半世紀ぶりとなる天皇の訪欧が実現したのは、1971年9月27日からであった。イギリス、オランダ、スイスなどのヨーロッパ諸国7カ国を訪問した。1975年には、当時の大統領ゲラルド・フォードの招待によって、アメリカ合衆国を公式訪問した。天皇の即位後の訪米は史上初の出来事であった。その後も、この皇室外交は継続され、昭和天皇は日本を象徴する立場として積極的に各国要人との親善に務めた³⁰。

4 昭和天皇の趣味

昭和天皇は子供の時から相撲が大好きで、以後ずっと相撲ファン、いわゆる「好角家」であった。直接観戦することも多く、戦前戦後合わせて51回、国技館に天覧相撲に赴いている。その一方、8歳の頃に雑誌『昆虫世界』を熱心に読み始め、生物学への関心を強めた。その後、特に天皇になってから、1927年赤坂離宮内に水田を開き、自ら田植えを始めた。皇居に移ってからも稲作を続け、この稲は伊勢神宮や宮中での祭に供えられた。戦後、公務のないときに生物学の研究を続けた。専門としたのは、ヒドロゾアの分類であった。そのテーマについて8冊の研究書を著した。ヒドロ虫などの新種もたくさん発見した³¹。

²⁹ 『実録昭和天皇』66-67頁。

³⁰ 茶谷「昭和天皇7つの決断の真相」72-83頁。『実録昭和天皇』76-77頁および80-81頁。

³¹ 『昭和天皇記念館』昭和聖徳記念財団、2006年、60-74頁。

終わりに

日本がバブル景気に包まれつつあった1987年に天皇の体調が悪化し1989年1月7日に崩御した³²。誕生から87年、神代を除けば歴代最高齢となった天皇であった。それから2月24日、各国の元首や特使も参列して、新宿御苑で大喪の礼が行われ東京都八王子市にある武蔵野陵に埋葬された。長い激動の昭和時代が終った。

私が昭和天皇に興味を持ち始めたのは20世紀の80年代の前半であった。その時、二・二六事件の青年将校と天皇との関係がとても面白いテーマだと思っていた。しかし資料が足りなかったため(『昭和天皇実録』はまだまとめられていなかった)、昭和天皇の本当の人柄、考え方などを理解出来なかった。そんな条件下では、昭和天皇について論文を書く力がなかった。そのため、研究テーマを真崎甚三郎と皇道派にした。昭和天皇が1989年に崩御するとその後十数年間にわたって昭和天皇に関する膨大な資料が公開されていた。それで1990年に日本へ留学したときに、是非「昭和天皇」というテーマをもっと詳しく研究しようと考えた。たくさんの資料を収集したばかりでなく、様々な皇室関係者と会見し、聴き取り調査を行った。たとえば、天皇の信頼の厚かった宮内大臣・内大臣牧野伸顕の孫の牧野伸和氏、宮内庁御用掛として昭和天皇の通訳であった真崎秀雄氏(真崎甚三郎長男)、侍従、皇室記者などの立派な人々であった。しかしその当時すでに外国人を含め多くの研究者や作家が昭和天皇についての本などを多く出版していたので、私はあきらめた。一冊の書物にはまとめられなかったけれども、その後も昭和天皇像・昭和時代に関する知識を蓄積している。戦争と平和、ナショナリズムと民主主義時代の中に天皇もとても興味深い存在であったからである。昭和前期の「神聖天皇」と「主権者天皇」、昭和後期の「象徴天皇」の両方を一身に体験している。こんな人物は世界中、どこにも存在しない。また、私の意見では、最近日本で昭和ノスタルジーが浮かび上がっている。それは戦前の大衆文化への郷愁なのか、それとも「神聖天皇」や「特別な」日本へのノスタルジーなのか。あるいは、皇太子が初めて民間出身の女性と結婚した出来事にも見られるように、どんな夢でも実現する時代、経済発展の時代、国民生活が潤った時代への郷愁であろうか。

参考文献

一次資料

宮内庁編『昭和天皇実録』12巻、東京書籍、2015-2017年。

内閣官報局編『法令全書』第22巻1、原書房、1889年(再版1978年)。

³² 高木顯『昭和天皇最後の百十一日』テレビ朝日、1991年。

『日本国憲法』1946年、<http://law.e-gov.go.jp/htmldata/S21/S21KE000.html>
Konstytucja Japonii [Constitution of Japan] 1946 (translated by Suzuki Teruji).
<http://www.pl.emb-japan.go.jp/relations/konstytucja.htm>.

主な二次資料

- 伊藤之雄『昭和天皇伝』文藝春秋、2011年。
 『実録昭和天皇』(別冊『宝島』2320)宝島社、2015年。
 加藤陽子『昭和天皇と戦争の世紀』、『天皇の歴史』第8巻、講談社、2011年。
 皇室事典編集委員会編『皇室辞典』角川学芸出版、2009年。
 『昭和天皇。その波瀾の一生』(別冊『歴史読本』5月号)、1990年。
 『昭和天皇記念館』昭和聖徳記念財団、2006年。
 高木顯『昭和天皇最後の百十一日』テレビ朝日、1991年。
 茶谷誠一他「昭和天皇7つの決断の真相」歴史 REAL編『昭和天皇』(別冊『歴史 REAL』)洋泉社、2015年。
 所功「二十余年の帝王教育」歴史REAL編『昭和天皇』(別冊『歴史 REAL』)洋泉社、2015年。
 豊下榎彦『昭和天皇・マッカーサー会見』岩波書店、2014年。
 秦郁彦『昭和天皇五つの決断』武芸春秋、1994年。
 波多野勝「裕仁皇太子ヨーロッパ外遊記」草思社、1998年。
 原武史『昭和天皇』岩波書店、2008年。
 原武史『「昭和天皇実録」を読む』岩波書店、2015年。
 半藤一利 他『「昭和天皇実録」の謎を解く』文藝春秋、2015年。
 文春新書編集部『昭和天皇の履歴書』文藝春秋、2008年。
 前坂俊之「地方巡幸で現れた素顔」歴史 REAL編『昭和天皇』(別冊『歴史 REAL』) 洋泉社、2015年。
 村上重良編『皇室辞典』東京堂出版、1980年。
 歴史 REAL編『昭和天皇』(別冊『歴史 REAL』)洋泉社、2015年。

Pałasz-Rutkowska, Ewa 2015. “General Masaki Jinzaburō and the Imperial Way Faction (Kōdōha) in the Japanese Army 1932-1935”, part two, *Analecta Nipponica* no. 5, pp. 139-183.

Pałasz-Rutkowska, Ewa 2016. „’Dwa ciała’ cesarza Meiji” [The ‘two bodies’ of Meiji Emperor]. In: Agnieszka Kozyra [&] Iwona Kordzińska-Nawrocka (eds.), *Cieleśność w kulturze. Religia, historia i sztuka* [The Body in Culture. Religion, History and Art], Warszawa: Japonica, pp. 162-178.

Starecka, Katarzyna 2014, „Geneza systemu cesarza-symbolu” [Genesis of the Symbol-Emperor System]. In: Urszula Mach-Bryson [&] Anna Zalewska (eds.) *Z chryzantemą w herbie* [With Chrysanthemum in Seal], Warszawa: Japonica, pp. 49-92.

English Summary of the Article

Ewa Pałasz-Rutkowska

Emperor Shōwa and His Times

Emperor Hirohito (1901–1989) began his reign on December 25th, 1926. It was the beginning of a new era in Japanese history, an era that was named Shōwa (1926–1989; The Illuminated Peace). In all of Japanese history, it was the longest, and yet a very diverse, reign by a single emperor. Japan was undergoing democratization and modernization, then, due to internal crisis opposed to Western influences, led wars. After the wars Japan once again turned towards democratization and development, finally becoming the third largest economic power in the world. The Shōwa period can be divided into three main sub-periods: 1926–1945: democratization, nationalism and war; 1945–1952: occupation; 1952–1989: peace, democratization and economic growth. In a nutshell, the author presents the life and works of Emperor Hirohito along with the main events that took place during his reign.

Keywords: Emperor Hirohito, Shōwa, Taishō, Meiji, Nogi Maresuke, Tōgō Heihachirō, “war and peace”, occupation, diplomacy, Shōwa genroku